

「無意識」欠落させるIT社会

基調講演

われわれの意識と無意識を水山にたとえるなら、水面の上が「意識」で、自分で分かっている部分。その下に自分で読めない大きな部分がある。これが「無意識」。体といってもいい。

水山の一角である意識が作り出してきたのがコンピューターであり、コミュニケーションは水山の水面から出た部分同士、意識をつなぐ道具といえる。

意識同士をつないでいるのが言葉であり、「情報」といっている。現代社会では水面上の部分だけが見えていて、基本的には上だけで動いている。脳と脳を情報でつないでいくのが私のIT社会のイメージだが、そのとき非常に多くの部分が切り落とされていることを意識してお

く必要がある。

情報化社会の大きな錯覚は、情報が常に変わるとみな考えられていること。ところが、いったん情報化されたものは変わらな

い。コンピューターの中に入っているものが変わったら大変で、勝手には変わらない。おしやべりはその都度消えていって、動いているとみんな思っているが、テープレコーダーに

人が、ものすごく増えた。学生に試験の代わりにリポートを書かせたら、学生のくせにやたら官僚的な文章が出てくるので、調べると、インターネットで官庁のホームページを抜き書きしている。情報になったことは上手に処理できるが、情報の生産ができない。言葉にするのは情報化する能力。学問とか勉強は、情報化する作業そのものだ。

今の学校教育は、意識の世界に閉じこもっている。意識の中に人間が住むようになった社会を私は「脳化社会」と言ったが、そこで問題になるのは意識にならない部分と意識の関係。現代は、意識の世界と無意識の世界で別なルールが存在することを認める気がない。われわれの子ども時代は、自然の中でこけつまるびつして、トンボ捕りや魚取りをやっていた子どもが、学校で情報処理の仕方を教わった。



東大名誉教授
養老 孟司さん
よろろ たけし

体を使って気づかせよ

「情報処理」というのは止まったものを再配置していく作業だから、人間の意識が得意としている。情報を作るとい

は、水山の下の部分を上に持つ

てくる作業。もともと意識の中になかったものを情報に変える。情報化すると、言葉になる。この情報になっていないものを情報にする作業を出来ない

分です。それができる人を養成することが目的だったはず。絶えず自分を変えていく作業、意識化する作業をしていないと、無意識の存在に気がつかない。

意識の世界が発達してくと、意識化する作業をおろそかにしてしまう。すべてを意識化していくベクトルが学問といえる。教育は、自分で

いまの子どもは逆で、テレビはあるし、言葉はほんらんしている。それに情報処理を学校で教えるも屋上屋を重ねるようなもので、教育は逆にならなければいけない。体を使って働けば水面下の存在に気がつくはずで、下がちゃんとすれば上もちゃんとする。